

一日研 報告

- 1 期日 1月31日
- 2 場所 総社市東公民館
- 3 参加者 O、CH、YO、AR、AS
- 4 内容
 - ・書籍紹介『歌謡見』島木赤彦 (O)
 - ・鉛筆画「金づち」(YO)
 - ・解釈『世界で一番美しいぼくの村』(AS)
 - ・木版画『花』(AS)
 - ・授業プラン『あとかくしの雪』(AR)
 - ・戸田実践『あとかくしの雪』(CH)

『歌謡見』島木赤彦からは、概念的言語では、それぞれがもっている固有のものを表現できないことを学びました。文学作品を読むことに当てはめると、「悲しさ」でも、その作品の登場人物だけに当てはまる「悲しみ」があるはずで、それは「悲しい」という概念的言語では表現することができません。作品の具体(言葉)から、きちんと読み取る必要があります。

YO 学級の鉛筆画「金づち」からは、一人一人の追及のあとがうかがえました。一人一人の作品の質を上げていくには、教師の教材解釈からくる展開の核(金づちの絵を「金づち」にするために大切なポイント)の設定の仕方が重要なこともわかりました。この一人一人の追及の姿勢は、普段の需要で集中力を養っている YO 学級だからこそ出てきたのだと思います。

AS さんは、解釈を文章にして持って来られました。自分の中にあるものを文章で表現されたのが、とてもよいことだと感じました。これを土台にして、今度は言葉にあたりながら、解釈を進めていきましょう。

木版画は、題材が子どもによって異なり、指導が難しい中、最小限の彫りで表現しようとしたあとが見て取れました。ただ、様々な題材があったからこそ、魅力的な題材も見つかったように思います。

「あとかくしの雪」の解釈では、まずは授業者が文章の中の言葉から、どこまではっきりとイメージを作ることができるかが重要だと感じました。あとは、どれだけ子どもの発言をもとに対立問題を作る準備ができるか、また、リアルな授業の場で対立を組めるかだと思います。

戸田学級の『あとかくしの雪』の授業記録では、私はただただ子どもたちの言葉からイメージを作る力に舌を巻くばかりでした。また、じっくりと読んでみたいと思います。文責 AR